

朝鮮に伝来した利瑪竇『兩儀玄覽図』

鈴木 信 昭

マテオ・リッチが一六〇三年に北京で刊行した『兩儀玄覽図』は、現在世界に二点現存しており、その中の一点は、韓国の崇実大学校韓国基督教博物館が所蔵している。本稿は、同世界図が一九三六年に朝鮮で発見されてから現在に至るまでの経過について考察し、さらには、そもそも同世界図を朝鮮に持ち込んだ人物が誰なのか、また将来した時期は何時のことであるのかという点について検討を試みた。考察の結果、崇実大学校韓国基督教博物館が所蔵する『兩儀玄覽図』は、黄中允が一六〇四年、ないしは一六二〇年に北京で購入したものであることが明らかとなった。さらには、同図とは別に『芝峯類説』の著者李睟光も『兩儀玄覽図』を閲覧していた可能性があったことも明らかにした。

目 次

はじめに

一、『兩儀玄覽図』の出現とその後の経緯

(2) 黄中允の場合

三、李睟光が見た『兩儀玄覽図』

朝鮮に伝来した利瑪竇『兩儀玄覽図』(鈴木)

二、『兩儀玄覽図』を朝鮮に伝えた人物

おわりに

(1) 黄汝一の場合

はじめに

イエズス会士マテオ・リッチ(利瑪竇)が、万曆三十(一六〇二)年に『坤輿万国全図』を、翌万曆三十一(一六〇三)年に『兩儀玄覽図』を作製したことは周知のことである。しかし、当初からその実存が確認されていた『坤輿万国全図』については、早くから研究が行われ、その形状や内容については勿論のこと、同世界図が日本や朝鮮の知識人にも大きな影響を与えたことなどが究明されてきた⁽¹⁾。

一方、『兩儀玄覽図』については、その現存が確認されていなかったために、リッチが万曆三十一年に世界図を作製した事実は知られていたにもかかわらず、その世界図の正式な名称が何であるのか、或いは世界図の内容が如何なるものであるのか、全く不明であった。ところが、後述する如く、一九三六年に朝鮮の黄炳仁氏自宅で発見された世界図が、『兩儀玄覽図』という名を冠して、製作者を利瑪竇、協力者を李應試として、万曆三十一年に刊行された大型の世界図であったために、ここに同図の伝存が初めて明らかとなった。

ところで、同図の伝存が確認される直前に、同図作製の協力者が「李應試」ではないかとする新たな説を提起したのは、後述する如く洪煨蓮氏であった⁽²⁾。同氏は、後に見る朝鮮儒学者李晬光が著した『芝峯類説』巻二「諸国部」の中に、「其国人利瑪竇李應誠者亦俱有山海輿地全図」とある「李應誠」という人名に注目したからであった。

実際のところ、その直後に『兩儀玄覽図』の伝存が明らかとなり、洪煨蓮氏の考察が正しかったことが証明さ

れたのである。しかし、同氏が考察の際に依拠した史料が朝鮮の儒学者の著作であったことと、さらには『両儀玄覽図』が初めて朝鮮で発見されたことなどが相まって、同図の朝鮮への伝来の時期や将来者をめぐって、しばしば混乱を招くこととなってしまった。

例えば、現存する『両儀玄覽図』の将来年については、当初、同図が北京で刊行された直後の頃に朝鮮に伝えられたのではないかと推測していたが、後に同図を所有することとなった金良善氏によって宣祖三十七（一六〇四）年将来説が提唱され、それがほぼ定説となっていた⁽³⁾。しかし、最近、光海君十二（一六二〇）年に伝来したものではないかとする新たな説が提起されるようになった⁽⁴⁾。

また、将来者については、当初から同図を所蔵していた黄炳仁氏によって、彼の先祖の一人である黄汝一が明へ使行した際に、万曆帝から下賜されたものであるとその来歴が伝えられていた⁽⁵⁾。ところがその後、黄汝一ではなく、彼の息子の黄中允が北京で購入した可能性が高いとする説が提示された⁽⁶⁾。このように、一九三六年に現存が確認され、現在、韓国の崇実大学校韓国基督教博物館が所蔵している『両儀玄覽図』については、将来した時期や同図を持参した人物について、未だ明確な結論に達しているとは言い難い状況である。

一方で、『両儀玄覽図』の朝鮮伝来の時期をめぐる問題については、さらに別の検討課題も存在する。つまり、朝鮮に流入した『両儀玄覽図』については、現存する同図のみが注目されてきたのであるが、同時期に他に伝えられた可能性はなかったのかという問題である。

前述した「其国人利瑪竇李應誠者亦俱有山海輿地全図」という記事は、『芝峯類説』巻二「諸国部」、「外国」条の中で、李暉光が「万曆癸卯（一六〇三年）」に弘文館で「欧羅巴国輿地図一件六幅」を見たとして述べている段落の後半に記されているものである。そのため、これまでの朝鮮西学史、及び東洋地図学史の研究においては、李暉光が宣祖三十六（一六〇三）年に見た「欧羅巴国輿地図一件六幅」とは、そこに「一件六幅」とあることが

ら、リッチの『坤輿万国全図』(六幅)であろうとして、同図が北京で刊行された翌年に早くも朝鮮に伝来した事実を宣揚してきた。しかし、その直後の記事に「其国人利瑪竇李應誠」は「山海輿地全図」を製作したとも述べているのである。果たして、ここにいう「山海輿地全図」とは、どのような地図なのであろうか。「利瑪竇」と「李應誠」の「山海輿地全図」とあることから、この「山海輿地全図」を『両儀玄覽図』と比定してよいのであろうか。仮に、そのように推測することが可能であるならば、李睟光は『両儀玄覽図』を何時、どこで閲覧することが出来たのであろうか。

こうした疑問が発生する原因は、そもそもこれまでの朝鮮西学史や東洋地図学史の研究において、李睟光が『芝峯類説』で言及した「欧羅巴国輿地図一件六幅」と「山海輿地全図」について、それぞれの地図の正式な名称が何なのか、或いは、それらがどのような内容の地図なのかという問題を本格的に検討してこなかったことにある。

以上のことから、本稿では、朝鮮における『両儀玄覽図』の発見とその後の研究の推移を概観して、崇実大学校韓国基督教博物館が収蔵する『両儀玄覽図』が、いつ頃、誰によって朝鮮に持ち込まれたのかという問題を考察したい。さらには、朝鮮における西学受容の研究に際して、常に利用されてきた李睟光の『芝峯類説』巻二「諸国部」の記事を検討しながら、李睟光の『両儀玄覽図』閲覧の可能性についても検討してみたい。

まず始めに、『両儀玄覽図』が一九三六年に発見されて後、どのような経緯をたどって崇実大学校韓国基督教博物館が所蔵するようになったのか、その点を明らかにしてみたい。なお、『両儀玄覽図』は、現在、上記博物館以外に中国の遼寧省博物館でも所蔵しており(同図は『中国古代地図集・明代』「文物出版社、北京、一九九四年」に収録している)、こちらは着色されているものである。

一、『両儀玄覽図』の出現とその後の経緯

前述した如く、マテオ・リッチが万曆三十一年に世界図を作製した事実については、彼が回想記でしばしば論じていたために、当初から知られていた。⁷⁾しかし、その世界図の正式な名称が何であるのか、またマテオ・リッチから世界図を教わり、それを版木に彫らせて出版した「リ・パオロ」とは誰なのか、長い間不明であった。

しかし、一九三六年四月、洪煥蓮氏によつて、新たな説が提起された。それは、朝鮮中期の儒学者李睟光（号は芝峯、一五六三〜一六二八）が著した『芝峯類説』巻二「諸国部」、「外国」条に記す

萬曆癸卯に、余の副提學に忝うする時、京に赴き回還する使臣の李光庭と權愷は、歐羅巴國輿地圖一件六幅を以て本館に送る、蓋し京師において得る者なり、其圖を見るに甚だ精巧にして、西域において特に詳しく、以て中國地方暨び我東八道、日本六十州に至るまで、地理の遠近と大小は、纖悉遺す無し、所謂る歐羅巴國は西域に在りて最も絶遠にして、中國を去ること八萬里、古より中朝に通ぜず、大明に至りて始めて再び入貢す、地圖は乃ち其國の使臣馮寶^{フン・バウ}の爲すところにして、末端に序文を作りて之を記せり、其文字は雅馴にして我國の文と異ならず、始めての信書同文は貴ぶべきとなすなり、按ずるに其國人利瑪竇^{リ・マオ}と李應誠^{リ・イェン・チェン}は、亦た俱に山海輿地全圖あり、王沂^{ワン・イ}の三才圖會などの書は、頗る其説を採用せり、歐羅巴の地界は、南は地中海に至り、北は氷海に至り、東は大乃河に至り、西は大西洋に至る、地中海は、乃ちこれ天地の中、故に名づくと云う、

（萬曆癸卯、余忝副提學時、赴京回還使臣李光庭權愷、以歐羅巴國輿地圖一件六幅、送于本館、盖得於京師朝鮮に伝來した利瑪竇『両儀玄覽図』（鈴木）

者也、見其圖甚精巧、於西域特詳、以至中國地方暨我東八道日本六十州、地理遠近大小、纖悉無遺、所謂歐羅巴國在西域最絶遠、去中國八萬里、自古不通中朝、至大明始再入貢、地圖乃其國使臣馮寶^{マフ}所爲、而未端作序文記之、其文字雅馴與我國之文不異、始信書同文爲可貴也、按其國人利瑪竇李應誠者^{マテウ}、亦俱有山海輿地全圖、王沂^{マテウ}三才圖會等書、頗採用其說、歐羅巴地界南至地中海、北至冰海、東至大乃河、西至大西洋、地中海者、乃是天地之中、故名云

という記事に注目したものであり、同氏は、史料中の「李應誠」は「李應試」の誤写であろうとした。その上で、もし「李應試」であるならば、彼は万曆二十(一五九二)年から始まった壬辰倭乱の時に、明将李如松の参謀を務め、かつマテオ・リッチから万曆三十(一六〇二)年八月六日に洗礼を受けて、洗礼名を「パオロ」とした人物であるため、リッチの回想記に記載する「リ・パオロ」とは「李應試」であろうと推定した。こうして洪煨蓮氏の研究によって、万曆三十一(一六〇三)年に作製されたリッチの世界図は、李應試によって刻版されたものである可能性が強まった。⁽⁸⁾

ところが、その二・三ヶ月後、当時早稲田大学商科の学生であった黄炳仁氏が彼の郷里である朝鮮江原道蔚珍郡箕城面沙銅里の自宅で「代々家宝としていた世界図」を日本に持参して、その調査を地図学史研究者である中村拓氏や鮎澤信太郎氏に依頼した。調査の結果、同図は、これまで不明とされていた万曆三十一年にマテオ・リッチが作製した世界図であり、名称を『両儀玄覧図』とするものであることが明らかとなった。さらには同図の中に、リッチの序文と共に、「李應試」の「刻両儀玄覧図」と題する序文も著録されていたために、『両儀玄覧図』を刊行した人物は、洪煨蓮氏が推測した如く、李應試であることも明確となった。⁽⁹⁾

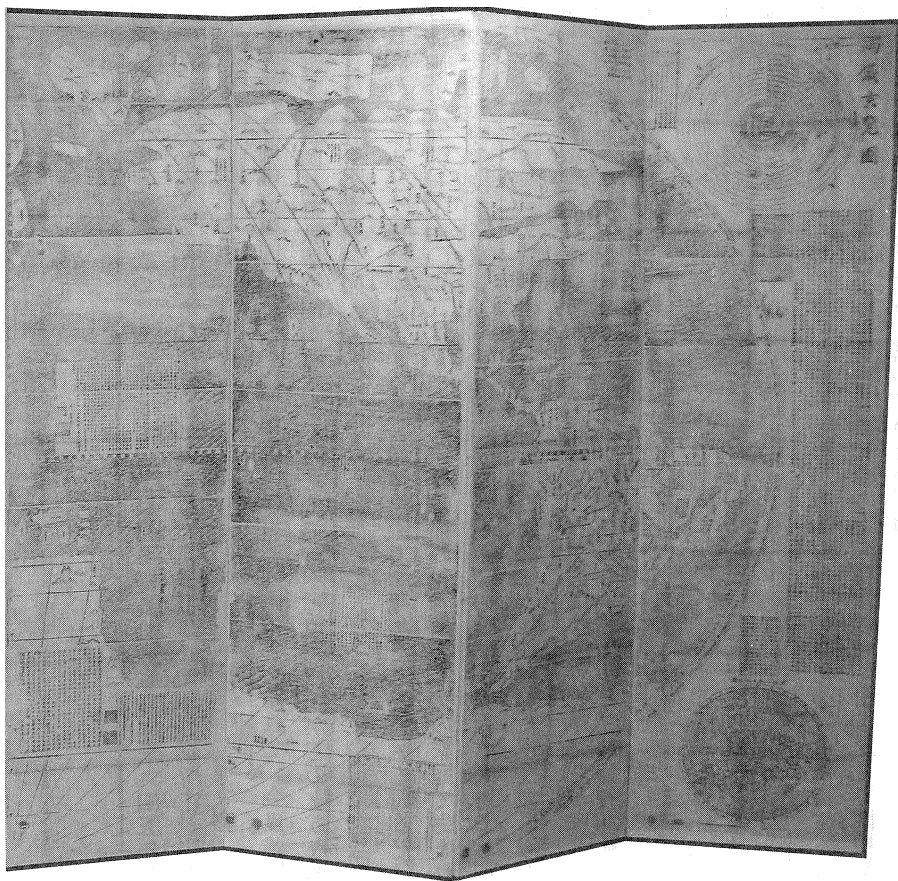
こうして『坤輿万国全図』とならんで、リッチの大型の世界図『両儀玄覧図』もその存在が知られるようになる

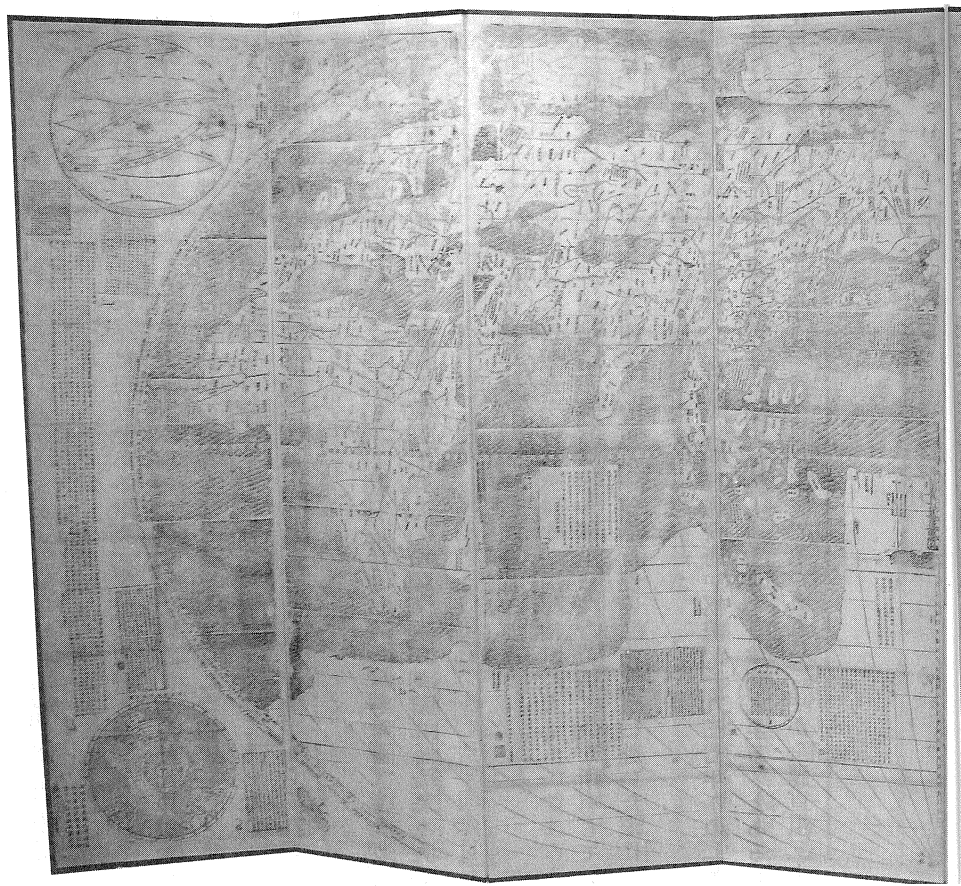
った。しかし、同図は、その後黄炳仁氏の帰国に伴って自宅に持ち帰られ、さらに一九四五年八月一五日以降続いた朝鮮半島の政治的・社会的混乱や一九五〇年六月に勃発した朝鮮戦争によって、所在が知られなくなってしまう。

しかし、実際のところ、『両儀玄覧図』は一九四五年直後に黄炳仁氏の手を離れて、金良善氏の所有するところとなり、同氏が主管する韓国基督教博物館が所蔵していたのである。黄炳仁氏がどのような理由から『両儀玄覧図』を手放すに至ったのか不明であるが、金良善氏は入手の経緯について「貴宝『両儀玄覧図』——筆者註」は、解放直後、黄炳仁氏の好意によって筆者が経営する基督教博物館で所蔵した」と述べているだけである。⁽¹⁰⁾

金良善氏（号は梅山、一九〇七—七〇年）は、平安北道義州郡の長老教会神父の家庭で生まれ育ち、宣川の崇実専門学校、平壤の長老会神学校を卒業して、一九四二年に長老教会の神父となった人物である。彼は崇実専門学校在学中からキリスト教史や考古学に関心を持っていたようであるが、如何なる資金源をもとにしていたのか不明ながらも、そうした分野の遺物を精力的に蒐集していたようである。そして、彼は蒐集した遺物を収蔵・展覧するために、一九四五年一月に、それまで朝鮮神宮が建立されていたソウル市内南山の麓に韓国基督教博物館を創設したのであった。⁽¹¹⁾ 金良善氏が『両儀玄覧図』を黄炳仁氏から購入したのは、まさにこの時期のことであろう。

しかし、一九五〇年六月二五日から始まった朝鮮戦争によって、金良善氏は博物館の収蔵品「数千点」を残したまま南へと避難することとなった。ところが、彼によれば「この世界的貴宝『両儀玄覧図』と安重根の獄中遺書——筆者註」をよく保存する道は、いつ死ぬか分からない無力な自分の身につけて彷徨するよりも、むしろ博物館庭に埋めておくのが最善の方法であると考えようになった。弾雨の中、引き返して博物館庭にこれらを埋めたが、三ヶ月後に掘ってみると水に浸り若干腐っていたが、物件はそのまま保存されていた」とあり、同図は⁽¹²⁾





付図 崇実大学校韓国基督教博物館所蔵『兩儀玄覽図』

戦禍を被ることなく、再び陽の目を見ることとなったのである。こうして博物館も一九五四年に再建され、『両儀玄覧図』はそこで保管され続けた。⁽¹³⁾

その後、金良善氏は、博物館が再建された年に母校である崇実大学校の教授となり、そこで朝鮮史、教会史、並びに考古学を教授するようになった。しかし、一九六七年に博物館の建っている南山の敷地が政府に接収されることになったため、それを契機に、同氏は博物館の遺物全点を崇実大学校に寄贈することに決めた。こうして『両儀玄覧図』は、一九六七年に金良善氏の手を離れて崇実大学校が所有するところとなり、また同大学校も校内に韓国基督教博物館を建設して、そこで『両儀玄覧図』を含む全点を収蔵・管理することになったのである(付図参照)。

以上、『両儀玄覧図』が一九三六年に発見されてから、今日に至るまでの経緯を見てきたが、それではそもそも崇実大学校韓国基督教博物館が所蔵する『両儀玄覧図』は、いつ頃、誰が朝鮮にもたらしたのであろうか。次項において検討を加えてみたい。

二、『両儀玄覧図』を朝鮮に伝えた人物

前項で述べた如く、『両儀玄覧図』は、江原道蔚珍郡箕城面沙銅里に住む黄炳仁氏が所有していたものである。黄炳仁氏の話によれば、同本は三百年前の先祖である黄汝一が燕行使として北京に赴いた際に、皇帝から下賜されたものであったという。⁽¹⁴⁾

しかし、その後、鮎澤信太郎氏は、『朝鮮人名辞書』(朝鮮総督府中枢院、一九三七年)の「黄汝一」項目中に「戊戌辨誣の書状を以て燕に赴き、名中夏を動かす。朝天録等の著あり、官参判に至る」とある記事に注目して、黄汝一が北京に使用した時期は、「戊戌」年、つまり宣祖三十一(一五九八)年から翌宣祖三十二(一五九九)

年のことであるため、この間の使行であれば、とうてい『両儀玄覽図』の入手は不可能ではないかとの疑義を提示した。さらに同氏は、同項目中に「子中允東暎と号す。文科に登り、官承旨に至り、独使を以て燕に赴き、又朝天録あり」とあることから、黄汝一の息子である黄中允も燕行使の一員として北京へ使行した事実があることに着目して、同図を将来した人物は黄中允ではなからうかと推測した。

また、『両儀玄覽図』が持ち込まれた時期については、「伝来の時を正確に決定することは困難である」としたものの、前掲の『芝峯類説』の記事から、『坤輿万国全図』が北京で刊行された翌年には早くも朝鮮に伝えられている事実に着目して、『両儀玄覽図』も刊行後多くの時を経ずして朝鮮に伝入したのである」と、将来した時期については未だ慎重な態度をとりながらも早期の伝来を推測したのである。⁽¹⁵⁾

鮎澤信太郎氏が依拠した史料は、『朝鮮人名辞書』掲載「黄汝一」の項目であった。同項目は、刊年は不明ながらも地方誌である『平海邑誌』に基づいて叙述されたものであったために、黄汝一将来の可能性は益々低くなつた。しかし、鮎澤氏はその後、『宣祖実録』等の官撰史料をもちいて、『両儀玄覽図』の将来者や伝来した時期を深く考察することはなかったようである。

こうした中で、一九六〇年代になると、『両儀玄覽図』を所蔵していた金良善氏が、同図を紹介する論考を発表した。その中で同氏は、『両儀玄覽図』は一六〇四年に黄汝一の子東暎が北京に行った時に得たものである。黄氏の家では明廷の下賜品であったと話しているが、東暎の燕行録を見ると、同図を北京で入手したものだと簡単に記録されているだけで、明廷から下賜されたものなのか、或いは宣教師から得たものなのか、さらには同図の印刷店で買い入れたものなのか不明である」とする新たな見解を発表したのである。⁽¹⁶⁾

このように金良善氏は、黄中允の使行日記である「燕行録」を典拠に、そこに黄中允自らが一六〇四年に北京で購入したと述べているとして、崇実大学校韓国基督教博物館が所蔵する『両儀玄覽図』は、宣祖三十七（一六

○四)年、つまり同図が北京で刊行された翌年に黄中允が北京で購入したものであると明確に結論を下したのである。

しかし、金良善氏は、同論文で「東廬の燕行録を見ると」と述べるだけで、「燕行録」が正式な書名であるのか、使行日記の一般的呼称であるのか、同本が版本であるのか鈔本であるのか、或いはその「燕行録」はどこが所蔵しているのか、という基本的情報は一切明らかにしなかったのである。このように同氏の論文には不備があったものの、この論考以降、黄中允の一六〇四年将来説が定説となった。⁽¹⁷⁾

ところが最近、呉尚学氏によって、黄中允が著述した燕行日記は、光海君十二(一六二〇)年のものしかないため、『両儀玄覧図』は、黄中允が光海君十二年の使行の際に持ち帰ったものであるとする新たな説が提示されるに至った。⁽¹⁸⁾

以上のように、現存『両儀玄覧図』を持ち込んだ人物とその時期については、確たる史料の根拠のないまま現在に至っている状況である。そもそも現存『両儀玄覧図』の将来者とその伝来の時期をめぐる問題については、黄中允によって著述されたとする「燕行録」だけが注目され、それ以外の同時代史料を用いて厳密な検討を行っているわけではない。そのため、本項では、黄汝一・黄中允父子の来歴を探りながら、同図がいつ頃、誰によって朝鮮にもたらされたのかという点について、改めて検討を加えたい。

(一) 黄汝一の場合

黄汝一、字は會元、号は海月軒。本貫は平海である。明宗十一(二五五六)年に生まれ、宣祖十八(二五八五)年の文科試「乙酉年別試榜」に及第して後、宣祖二十(二五八七)年頃に初めて藝文館の一職である検閱(正九品官)に叙任された。⁽²⁰⁾その後、彼は宣祖二十七(二五九四)年に刑曹正郎(正五品官)に拔擢され、宣祖三十一

(一五九八) 年九月には司憲府掌令(正四品官)にまでのぼった。⁽²²⁾ 黄汝一の父や祖父が科挙に及第した形跡が見えないことから、彼のこうした順調な昇進には、この時期に同時進行していた壬辰倭乱との関係があったものと考えられるが詳論は控えたい。

いずれにせよ、順調に官位をのぼっていた黄汝一は、宣祖三十一年十月に漢城を出発した「陳奏使」の一員として北京に赴いた。この時、彼は朝鮮の国士監である成均館の司藝(正四品官)として奉職していたが、「陳奏使」の書状官として北京に赴くことを命ぜられたのである。⁽²³⁾ この「陳奏使」の帰国がいつ頃であったのか、管見の限りでは不明である。しかし、毎年秋頃に漢城を出発する冬至使は、翌年春には帰国しており、また一回の使節が一年以上も北京に滞在することは、特別の事情がない限り考えられないために、この時の「陳奏使」も早ければ翌宣祖三十二(一五九九)年の春までに、遅くとも宣祖三十二年秋前には帰国したであろう。

こうした点を勘案するならば、宣祖三十二年は『両儀玄覧図』は勿論のこと『坤輿万国全図』さえ未だ刻版されていない時期である。そのため黄汝一がこの使行の時に『両儀玄覧図』を持ち帰るということはあり得ない。それでは、その後に黄汝一は同図を将来する機会があったのであろうか。

黄汝一は、宣祖三十二年以降も官職を得ることがあったために官撰史料にその名を残している。例えば、『両儀玄覧図』が刊行された宣祖三十六年前後に注目すれば、宣祖三十四(一六〇二)年十月二十二日に慶尚北道醴泉郡の郡守に任命されたという記録もある。⁽²⁴⁾ しかし、管見の限りでは、宣祖三十一年の時を除いて、その後黄汝一が北京使行に加わったという記録はない。そのため、黄炳仁氏が述べるように、同図は祖先が中国から持ち帰ったものであるとするならば、黄汝一の可能性は低いと見なければならぬ。それでは黄中允の場合はどうだろうか。以下、検討を続けたい。

(2) 黄中允の場合

黄中允、字は道光、号は東暕。彼の来歴を實録によって見てみれば、おおよそ次のようになる。彼は宣祖十(一五七七)年に生まれ、光海君四(一六一二)年の文科試である「壬子年増廣榜」の「甲科」に登科した。父黄汝一の政界における影響もあつたのであろうか、及第三年後の光海君七(一六一五)年に王世子侍講院の一職である司書(正六品官)に拔擢され、同年中に司諫院正言(正六品官)、同十年には司諫院献納(正五品官)、と順調に頭職を歴任した。

そして、彼はその後も中央の官僚としてその地位を保ち続け、光海君十二(一二二〇)年の四月に北京への使行を命ぜられることとなつた。⁽²⁸⁾この時の使節「奏聞使」は、同年四月に漢城を出発し、年内には帰国しているが、黄中允は北京へ向かう往路と北京での滞在期間の日記を『西征日録』として書き残している。そのため彼の北京滞在中の様子は、ある程度窺い知ることが出来る。しかし、『西征日録』には、彼の公的な言動しか記されていないため、私的な行動については不明である。そのため、黄中允がこの使行時に『両儀玄覽図』を入手したかどうかは分らない。⁽²⁹⁾

さて、ここで検討しなければならない問題が二つある。先ず第一の問題は、前述したように、黄中允が北京使行の一員として、宣祖三十七(一六〇四)年に北京を訪れた際に『両儀玄覽図』を手に入れた、とする金良善氏の説である。なぜならば、同氏は、東暕の燕行録を見れば『両儀玄覽図』を一六〇四年に北京で入手したと簡単に記録されていると述べ、黄中允によって著述された使行日記が存在することを明言しているからである。⁽³⁰⁾

第二の問題は、黄中允の使行日記には、これまでのところ光海君十二年の『西征日録』の現存が確認出来るが、金良善氏によれば、黄中允による「燕行録」があると言われ、また前引の『朝鮮人名辞書』には、何時の使行日記かは不明ながらも、黄中允は「朝天録」を著したと記載しており、複数の使行日記の存在を窺い知ることが出来

るのである。つまり、黄中允が光海君十二年以外にも北京使行を行っていれば、「燕行録」、ないしは「朝天録」と題する使行日記を書き残していた可能性があるということになる。先ず始めに、これら二つの問題点を解明したい。

ところで、金良善氏は、宣祖三十七年の北京使行を記した黄中允の使行日記について、その原書名が『燕行録』と題するものとしているのか、それとも使行日記の一般的呼称という意味で「燕行録」と述べているのか不明である。しかし、管見の限りでは、黄中允が宣祖三十七年に著した「燕行録」を捜検することは出来なかった。それでは、果たして黄中允は、宣祖三十七年当時、使行に加わり北京に滞在していた可能性はあったのであろうか。宣祖三十六年半ばから翌三十七年前半にかけて、北京に向かった燕行使節は都合五回あったことが『宣祖実録』から確認できる。その内訳は、それぞれ出發が宣祖三十六年四月の「謝恩兼千秋節進賀使」、同年五月の「聖節使」、同年七月の「冬至使」、同年十一月の「謝恩兼陳奏使」、そして翌宣祖三十七年五月の「王世子冊封奏請使」である。しかし、いずれの使節についても、黄中允が参加した足跡を見つけたことは出来ない³¹⁾。

宣祖三十七年当時、黄中允は二十七歳。未だ司馬試や文科には及第していないものの、通常の燕行使の場合、国王から任命される正式な使臣以外に、その何倍もの私的に参加する人々（その多くは商人であるが、それ以外に士大夫でも使臣の縁戚を利用して私的に参加する者も多くいた）がいるため、黄中允も私的に参加する可能性がないわけではない。

しかし、彼が生前に著述した自身の「家状」（祖先の行跡と共に自身の学問的發展や見聞を幼少の時から年次を追って記述している）によれば、宣祖三十五年は醴泉郡に赴任した父黄汝一（一）のことが特記され、翌同三十六年については不明ながらも、翌同三十七年は科擧の初等試験である司馬試の勉強のこと、翌同三十八年の春には念願の司馬試に及第したことが記されているだけであり、この時期の北京使行を窺わせるような記事は全く見え

ない。⁽³²⁾それに対して、同「家状」の「庚申」条(光海君十二、一六二〇年)では、明に遣わされる「奏聞使」の一員に任ぜられたことを取り上げ、その時の北京使行に関する文章を四張にもわたって縷々と述べているのである。

このように、黄中允自身によって書かれた「家状」を管見する限り、北京使行に関連した記事は、光海君十二年の条にしか存在しない。光海君十二年の北京使行については、長々とその行跡を記した黄中允が、果たして宣祖三十六年から同三十七年にすでに北京使行に加わっていたのであれば、なぜ一言半句の言及もしなかったのであろうか。

以上のように、官撰史料の実録などから見た黄中允の経歴、黄中允自らが書いた「家状」の内容を勘案すれば、金良善氏が指摘した如く、黄中允が宣祖三十六年、ないしは翌三十七年に北京使行の一員に加わった可能性は低くなってくるのである。⁽³³⁾

次に検討しなければならないのは第二の問題である。『朝鮮人名辞書』によれば、黄中允には使行日記である「朝天録」があったという。同辞書が『西征日録』とせずに、「朝天録」としたことは、光海君十二年以外に黄中允が北京使行を行い、その時の使行日記として「朝天録」を残した可能性もあるであろう。果たして、黄中允は「朝天録」を著述したのであろうか。

ところで、『朝鮮人名辞書』の「黄汝一」の項目は、『平海邑誌』を参照してなったものであることが明記されている。管見の限りでは、『平海邑誌』と書名するものを所蔵する機関は韓国にないようであるが、『平海郡誌』⁽³⁴⁾と題するものは現存している。同書、「人物」の条によれば、黄中允は、

宣廟朝、乙巳(宣祖三十八、一六〇五年—筆者註)、司馬の両試に中り、壬子(光海君四、一六二二年—筆

者註）、文科に登る、官は承旨に至る、独使を以て上国に聘し、また朝天録あり、号曰く、東隕と、

とある。さらに、同じく「人物」の条には、「黄汝一」も記載されており、そこには

少にして文章節行を以て名を当世に知られ、宣廟朝、司馬に中り、文科に登る、（中略）戊戌（宣祖三十一、一五九八年―筆者註）辨誣の書状を以て、上国に聘し、華人に見稱さる、朝天録あり、文集世に行う、官は参議に至る、

とある。黄汝一の最終官位について、『平海郡誌』では「参議」とし、『朝鮮人名辞書』では「参判」にしているという違いはあるものの、その点を除けば、『平海郡誌』と『平海邑誌』に見える黄汝一と黄中允の記述内容はほぼ同じである。ここで注意しなければならないのは、両書とも黄汝一と黄中允の北京使行の記録について「朝天録」と記していることである。

しかし前述したように、黄汝一は、宣祖三十一年に「陳奏使」の書状官として北京に赴いてはいるものの、その時の使行日記は『銀槎録』と題しており、「朝天録」とはしていない。また、黄中允についても、既に検討した如く、光海君十二年の北京使行だけが確認でき、その時の使行日記は『西征日録』と題しており、「朝天録」とはしていないのである。そのため、『平海邑誌』と『平海郡誌』にいう「朝天録」とは、明代に北京を訪れた朝鮮使節一行がそれぞれ書き残した使行日記の一般的呼称として「朝天録」と記したものであり、固有名称として記したものではないと判断されるのである。³⁵⁾

以上、現存する官撰史料などをもとにして判断すれば、現存『両儀玄覧図』は、黄中允が光海君十二年の奏聞

使に同行した際に、中国で購入した可能性が高くなつてくるのである。

さらに検討を加えれば、光海君十二年より後に、黄中允や彼の子孫によつて『両儀玄覽図』が将来された可能性も考えられないわけではない。しかし、その可能性はないであろう。なぜならば、光海君十二年以降の黄中允の生涯と、その後の平海黄氏の状況を見ることによつて明らかになるからである。

黄中允は、奏聞使に同行して帰国するや、翌光海君十三年四月に、王命の出納を管轄する官衙である承政院の都承旨や右承旨に拔擢され、光海君に近侍するようになった。しかし、翌光海君十四(一六二二)年三月に光海君が西人の諸臣によつて廃され、新たに仁祖の時世になるにおよんで(仁祖反正)、それまで承政院の承旨であつた黄中允も、光海君の寵臣ということで廟堂を追われることとなつてしまつた。事態がそれで終わればよかったが、二年後の仁祖二(一六二四)年になると、光海君政権を担つていた大北が廟堂から一掃されることとなり、黄中允も同年四月には「賊魁」の一人として司憲府と司諫院から弾劾され、流配となつてしまふのである。⁽³⁶⁾

こうした西人の攻撃は、平海黄氏にとつて黄中允一人に止まらなかつた。既に政界から退いていた父の黄汝一も仁祖七年十二月になると、光海君政権の後半に一時東萊府使として日朝關係の実務を担当していた際に、対馬側から賄賂をもらつたとの嫌疑をかけられ、糾問されることとなつたのである。⁽³⁷⁾その後、黄中允は仁祖十一年に罪を許されたものの、「放婦田里」を受け、郷里の江原道平海に強制蟄居を命じられた。⁽³⁸⁾以後西人派による政權掌握が続く中で、彼は政界に復帰することはなかつた。また黄中允の子孫も科擧に及第した形跡もなく、以後、平海黄氏は、完全に地方に居住する士大夫として生活を続けていくこととなるのである。

このように現存『両儀玄覽図』は、当初から平海黄氏が所有していたものであるとするならば、それを中国から持ち帰つた人物は、黄中允しか考えられない。さらには将来年についても、黄中允が北京に使節の一員として出かけた光海君十二年が可能性として高く、宣祖三十七年であるとするならば、金良善氏が閲覧した「燕行録」

の再発見を待たなければならないであろう。

それでは韓国に現存する『両儀玄覧図』が北京での刊行から一年後、ないしは一七年後に朝鮮にもたらされたとするのであれば、前述した『芝峯類説』の記事をどのように理解したらよいのであろうか。

これまでの研究によれば、光海君六（一六一四）年に完成した『芝峯類説』巻二「諸国部」、「外国」条に「萬曆癸卯、余忝副提學時、赴京回還使臣李光庭權愷、以歐羅巴國輿地圖一件六幅、送于本館、盖得於京師者也」とあることから、「歐羅巴國輿地圖一件六幅」とは『坤輿万国全図』のことであり、同世界図は「万曆癸卯（宣祖三十六）年に朝鮮に伝えられたものである」としてきた。また、同史料に「按其國人利瑪竇李應誠者、亦俱有山海輿地全圖、王沂三才圖會等書、頗采用其說」とあることから、「李應誠」とは『両儀玄覧図』を刻版した「李應誠」のことであるため、『両儀玄覧図』も宣祖三十七年頃には朝鮮に伝えられたのではないかと考えてきた。

しかし、既に考察したように、韓国に現存する『両儀玄覧図』は、黄中允が光海君十二年に持ち帰った可能性が高く、『芝峯類説』は、既にその六年前に完成されているのである。さらには、黄中允が同図を宣祖三十七年に将来したとしても、後述するように黄中允と李睟光は所属する党派も異なり、両者が親交を持っていたことがわがせる史料も残っていないのである。それでは、李睟光が見た『両儀玄覧図』とは、現存するものとは異なる『両儀玄覧図』であったのであろうか。もしそうであるならば、李睟光は『芝峯類説』を完成させるまでの間に『両儀玄覧図』を閲覧、ないしは入手していたことになる。果たして李睟光にそのようなことが可能だったのであろうか。

次項においては、李睟光の略歴と関連させながら、彼の見たリッチの世界図が何であったのかという問題を検討し、さらには、そのことと関連して、果たして崇実大学校韓国基督教博物館が所蔵している同図が朝鮮にもたらされた最初の『両儀玄覧図』であったのかという問題についても考察を加えてみたい。

三、李睟光が見た『両儀玄覽図』

李睟光、字は潤卿、号は芝峯。本貫は全州、第三代国王太宗の子である裨（敬寧君）の六代孫にあたる。明宗十八（一五六三）年に生まれ、仁祖六（一六二八）年に死去する時まで、官界で重きをなした人物である。彼は、党派的に西人に近い立場にあり、大北の黄中允とは異なる。二人とも同時代の知識人であったが、党派の点から見れば、身近で親交を深めるような間柄ではなかったと推測される。また李睟光は、朝鮮王朝後期における実学思想勃興の先駆的人物としても高く評価されている。こうした彼の実学的側面の思想的営為を書き記したものが『芝峯類説』である。まず始めに、李睟光の経歴をふまえながら、『芝峯類説』の記事を分析してみたい。⁽³⁹⁾

前引の『芝峯類説』によれば、「萬曆癸卯」年、つまり万曆三十一（宣祖三十六、一六〇三）年、李睟光が弘文館の副提学であった時に、燕行使節として中国から帰国した正使の李光庭と副使の権愷が北京で手に入れた「歐羅巴国輿地図一件六幅」を弘文館に搬入したので、それを閲覧する機会があったという。

弘文館は、経籍に関する事務を担当する官衙であったために、多くの典籍を所蔵する機関でもあった。本来、燕行使節が中国で購入した書籍は、弘文館に搬入せねばならないという規定はなかったが、この時期は、壬辰倭乱が終息してから日もまだ浅く、倭乱によって灰燼となった典籍を補充するために、朝鮮政府自ら弘文館の充実を厳命していた時期でもあった。こうした事情から、正使李光庭等は「歐羅巴国輿地図」を弘文館に搬入したのである。

この時の燕行使節の正式な名称は「中宮誥命冠服奏請使」というものであり、宣祖三十五年に漢城を発ち、翌三十六年四月に帰国している。⁽⁴⁰⁾

一方、李睟光が弘文館副提学に就任したのは、宣祖三十六年六月五日である。⁽⁴¹⁾その後、李睟光は、同年の八月

二十日に吏曹参議となつて転任しているため、彼が弘文館副提学であつたのは、僅かに二ヶ月余りの期間となる。⁽⁴²⁾つまり、李睟光は、この期間に弘文館で「歐羅巴国輿地図一件六幅」を閲覧したことになる。李睟光のこの在任期間から考えれば、彼がこの時に見ることの出来た世界図は、『坤輿万国全図』しかあり得ない。それは「一件六幅」という『坤輿万国全図』の形状に関する記述からも肯首出来ることである。それでは、既述史料中であつた「李應試」と「山海輿地全図」との關係をどのように考えたらよいのであろうか。

ところで、『芝峯類説』とは、李睟光が光海君六⁽⁴³⁾（一六一四）年に刊行した類書であるが、同書の自序にある如く、国内外の多くの典籍を閲覧・参考にして著述したものである。それら参考とした書籍の中でも、王圻の『三才図会』は、李睟光自身かなり重要視したと見え、『芝峯類説』の中で少なからず引用している。しかし、ここで注意しなければならないことは、王圻の『三才図会』の刊行は、万曆三十七（光海君元、一六〇九）年のことであり、『芝峯類説』成立の僅か五年前のことであつたということである。つまり、『芝峯類説』と『三才図会』の刊行年を念頭にして、前掲『芝峯類説』の「万曆癸卯……」を見た時に、次のような点が指摘出来るのである。

第一は、朝鮮に初めて『坤輿万国全図』などの漢訳西学書が伝来したのは、宣祖三十六（一六〇三）年のことであつた、ということを示す史料として前記『芝峯類説』の「万曆癸卯……」の記事は利用されてきた。そのため、これまで同史料は、万曆癸卯年（宣祖三十六年）前後の頃を著述したものであらうとこれまでの研究者は考へてきた。しかし、この記事では、王圻の『三才図会』についても言及しているために、宣祖三十六年前後のことに限らず、少なくとも光海君元（一六〇九）年までに起きたことについても述べている史料と見なければならぬのである。

第二は、『三才図会』についての言及と関連して、李睟光がいつ頃どのようにして同書を手に入れたのかという問題である。『三才図会』の刊行年から考えれば、李睟光は光海君元年から同六年の間に『三才図会』を手に入

れたことになる。以上、二つの問題点の中、まず第一点から検討していきたい。

前記「万曆癸卯……」の記事によれば、李睟光は弘文館に搬入された「歐羅巴国輿地図一件六幅」を見て、中国の西域以西が甚だ精巧に描かれていることに驚きつつ、この世界図が中国から「八万里」離れている「歐羅巴国」の「使臣馮寶實」によって作られたものであると紹介している。さらには、「使臣馮寶實」が世界図の末端に著述した「序文」は、文字が雅馴で、我国の文字と少しも変わらないとも伝えている。

『坤輿万国全図』の第一幅には、「利瑪竇撰」と署名した「地與海本是円形」から始まる地図総説が掲載され、また第六幅には、「歐羅巴人利瑪竇述」と署名する「論地球比九重天之星遠且大幾何」なる記事が記載されている。李睟光が「利瑪竇」とせずに、「使臣馮寶實」と誤記したり、世界図の巻頭とすべきところを「末端作序文」と誤認してしまったのは、彼が弘文館で『坤輿万国全図』を閲覧した時に、その内容を書き留めておかなかったか、書き留めたとしても簡単なメモ程度しか残しておかなかったためであろうと考えられる。⁴⁴⁾

このように李睟光は、十年前に閲覧した『坤輿万国全図』の作製者については、誤認してしまっているのである。しかし、史料中の「按」以降の文章で、「其国人利瑪竇李應誠」はともに「山海輿地全図」を作製したり、王圻の『三才図会』などでは、「頗るその説を採用している」と述べていることから、李睟光がこの文章を書いている時点では、明らかに「利瑪竇」の名前が記録された「山海輿地全図」を閲覧していたことになる。そして、この「李應誠」という名の存在は、前項で述べたように『坤輿万国全図』にはなく、『両儀玄覽図』のみに記載されている人名であるために、その「山海輿地全図」とは『両儀玄覽図』以外に考えられないのである。つまり、李睟光は『芝峯類説』の著述にあたり、『両儀玄覽図』を閲覧、ないしは入手していたと考えることが出来るのである。

それでは、李睟光は、いつ頃、どのような機会に『両儀玄覽図』を閲覧することが出来たのであろうか。第二

の『三才図会』入手の問題と関連させながらこの点を検討してみたい。

李暉光が『芝峯類説』を著述するに際して利用した多くの書籍は、おそらくは家蔵のものであつたろう。宣祖三十一（一五九八）年に収束した壬辰倭乱の結果、政府が管理・所蔵する弘文館等の典籍類は、その多くが灰燼に帰したり、或いは日本軍の掠奪の対象となつたため、こうした百科全書的内容のものを著述する場合には、個人の蔵書を利用する以外になつたはずである。壬辰倭乱の十六年後に、膨大な書籍を参考として『芝峯類説』を完成することが出来た大きな理由は、李暉光自身の資質もさることながら、彼の家蔵書が壬辰倭乱の被害を受けない安全に保たれていたためであろう。

しかし、家蔵書が倭乱の被害を受けなかつたとはいうものの、『芝峯類説』の中で『事文玉屑』（万曆二十五、一五九七年刊）や『三才図会』のように、倭乱中やそれ以降に中国で刊行された典籍を参照しているという事実、李暉光が『芝峯類説』完成直前まで、中国の新刊書籍の入手に努めていたことを意味している。果たして、膨大な分量をほこる類書の『事文玉屑』、『三才図会』や、全八幅の大型で細密な地名や地誌を記す『両儀玄覧図』などを李暉光はどのようにして入手・閲覧することが出来たのであろうか。特に、『三才図会』などは、分量が多いという以上に、全項目に絵図が掲載されているため、李暉光が朝鮮国内で借覧し筆写したとしても多大な労力と時間を費やしたであろうことは想像に難くない。

以上の点をふまえて李暉光の経歴を見た時、彼が燕行使に参加して北京を訪れた事実のあることに注目される。初めての使行は、宣祖二十三（万曆十八、一五九〇）年の聖節使の書状官として、次には、宣祖三十（万曆二十五、一五九七）年の進慰使として、そして第三回目には、光海君三（万曆三十九、一六一一）年の冬至兼奏請使の副使として北京に赴いている⁽⁴⁵⁾。この中で、第三回目の使行が最も注目されるのである。

この時の使行は、光海君三年八月に漢城を出発して、翌光海君四年五月に帰国しているが、李暉光の使行日記

『續朝天録』によれば(八月十日から翌年三月二十日までのことが記されている)、使節一行は、この間、北京に長期間滞在していることが分かる。この使行で、李睟光がどのような書籍を購入したのか、史料から明らかに出来ないために、推測の域を出ないのであるが、『両儀玄覽図』や『三才図会』は、おそらくはこの時の使行の際に、購入したのではないと考えられる。つまり李睟光は、黄中允が宣祖三十七年、或いは光海君十二年に北京で購入した『両儀玄覽図』とは異なる同図を入手して、『芝峯類説』の著述の際に利用したと考えられるのである。⁽⁴⁶⁾

以上、李睟光が光海君三年の北京使行の際に、『両儀玄覽図』を購入した可能性について述べてきたが、上述した推測がもし妥当であるならば、現存する『両儀玄覽図』とは別に、中国で刊行されてから八年後に『両儀玄覽図』が朝鮮に伝来していたことになるのである。

おわりに

長い間不明であつたマテオ・リッチの『両儀玄覽図』は、一九三六年に初めて朝鮮半島で発見された。当時の所有者は黄炳仁氏であつたが、その後所有者は金良善氏に代わり、現在は韓国の崇実大学校韓国基督教博物館が所蔵している。

同図は、黄炳仁氏の祖先の一人である黄中允が宣祖三十七(一六〇四)年、或いは光海君十二(一六二〇)年に北京使行の際に購入し持ち帰つたものであつた。その後、黄中允は政界で失脚し、郷里の江原道に放逐されてしまった。また、その後の政界は西人や老論が支配し、とうてい黄氏の所属する大北が登場する機会はやつてこなかった。そのことが現存の『両儀玄覽図』には幸いしたのかも知れない。家門の最盛期をつくりあげた黄中允や彼の父である黄如一の残した遺物こそが、代々地方で暮らす同氏にとって唯一自らの身分が両班であることを示す「宝物」であつたであろう。『両儀玄覽図』は、まさに同氏族にとって何物にも代え難い「宝物」であつた

のである。そのことは代々の黄氏によつて後生大事に守られてきたことから肯首できることである。

しかし、社会的な身分制秩序が希薄となつた二十世紀の前半に、黄炳仁氏によつて『両儀玄覽図』が手放されてしまつた事實は、同世界図が四百年の間、黄汝一家門の中で、どのように位置付けられ守られてきたのかを如実に物語っているように思われる。西人・老論支配下の両班社会において、時の流れとともに、同図の将来者が廃王とされた光海君の寵臣黄中允から燕行の経験ある黄汝一へと移行され、北京の一書肆で購入したものが中国の皇帝から下賜されたものと昇華転変していく過程は、郷村におけるその後の平海黄氏の立場を端的に物語っているのかもしれない。

現存する『両儀玄覽図』は、朝鮮に持ち込まれた唯一のものではなかつたであろう。李睟光の『芝峯類説』を考察した結果、既に李睟光も中国で購書し、閲覧していた可能性のあることが明らかとなつた。マテオ・リッチが作製した『坤輿万国全図』や『両儀玄覽図』は、少なからず朝鮮に持ち込まれたであろう。それら世界図の朝鮮における足跡を今後とも追つていきたい。

註

(一) マテオ・リッチの『坤輿万国全図』に関しては、これまで多くの研究がなされ、すぐれた研究成果が挙げられている。その中でも特筆すべき研究成果として、洪煥蓮「考利瑪竇の世界図」(『禹貢半月刊』五卷三・四合期、一九三六年)、鮎澤信太郎「マテオ・リッチの世界図に関する史的研究」(『横浜市立大学紀要』一八巻、一九五三年)、船

越昭生「『坤輿万国全図』と鎖国日本」(『東方学報』四一輯、一九七〇年)、海野一隆「明・清におけるマテオ・リッチ系世界図」(山田慶兒編『新発現中国科学史資料の研究』京都大学人文科学研究所、一九八五年)を代表的なものとして取り上げることが出来る。本稿における『坤輿万国全図』に関する記述は、これら四人の諸先学の研究成果に負

っている。

なお最近、世界各地に現存する『坤輿万国全図』と『兩儀玄覽図』、ならびにそれに関連したマテオ・リッチ系の世界図を紹介した黄時鑒『利瑪竇世界地圖研究』(上海古籍出版社、二〇〇四年)が刊行された。同書の附録には、『坤輿万国全図』や『兩儀玄覽図』中に著録する序文、跋文などが掲載されており有益である。

(2) 前掲の洪煥蓮「考利瑪竇の世界図」、一九二〇頁参照。

(3) 金良善「明末清初耶穌会宣教師들이製作한 世界地圖와 그 韓國文化史上에 미친 影響」(『崇大』六号、一九六一年、同論文は、同氏『梅山国学散稿』に再録、崇田大学校博物館、一九七二年、一八七頁参照)。同論文は、第二次世界大戦以降になって、『兩儀玄覽図』が大韓民国に現存していることを初めて明らかにした論文である。しかし、同論文は韓国語で書かれており、さらにはこの時期、日本と韓国との間に国交が回復されていなかったこともあり(日韓基本条約の調印は一九六五年のことである)、『兩儀玄覽図』現存の情報は直ぐに日本に入ってくることはなかった。

(4) 吳尚学「朝鮮時代の 世界地圖와 世界認識」(『地理學論叢』別号四三、ソウル大学校社会科学学地理学科、二

〇〇一年)、一一八頁参照。

(5) 鮎澤信太郎「利瑪竇の兩儀玄覽圖に就いて」(『歴史教育』十一巻七号、歴史教育研究会、一九三六年)、四六頁参照。

(6) 鮎澤信太郎「マテオ・リッチの兩儀玄覽図について」(『地理學史研究』第一集、柳原書店、一九五七年)、一四頁参照。前掲の金良善『梅山国学散稿』(二八七頁)を参照。

(7) マテオ・リッチの回想記については、邦訳(川名公平他訳)の『中国キリスト教布教史』全二巻(生田滋他編『大航海時代叢書Ⅱ』八・九巻所収、岩波書店、一九八二、八三年)を利用した。『兩儀玄覽図』については、同訳書の「第四の書、第一五巻」の中で、「それでも地図を求める人々の希望に応じきれなかった。そこで、あるキリスト教徒が、わたしたちの助力で、八幅の図から成るさらに大きなものをつくり、版木を印刷者に売り渡した」(同訳書、八巻、五一三頁)とある。さらには、「わたしたちもキリスト教徒のリ・パオロが彫版させた別の版木を届けてもらったが、それは八枚から成る、はるかに大きなものであった」(同訳書、九巻、一六二頁)とあることから、名称は不明ながらも、リ・パオロによって作製された世界図が存在することは知られていた。

(8) 前掲の洪煥蓮「考利瑪竇の世界図」、二〇頁参照。

(9) 前掲の鮎澤信太郎「利瑪竇の両儀玄覽圖に就いて」、四六頁参照。

(10) 前掲の金良善『梅山国学散稿』、一八七頁参照。

(11) 崇実大学校韓国基督教博物館『승실대학교 한국기독교박물관』(同博物館編、二〇〇四年)の「김영선과 한국기독교박물관」、九頁参照。

(12) 前掲の金良善『梅山国学散稿』、一八七〜八頁参照。

(13) 朝鮮戦争中の『両儀玄覽図』の所在については、金良善氏自身が博物館の庭に埋めて戦禍を逃れたと述べているのだが、これ以外に「朝鮮戦争当時、博物館の所蔵品を日本の国際基督教大学に一時保管したり、一部はより安全に保管するためにアメリカ合衆国に移送したこともあった」と論じるものもある(『韓国民族文化大百科事典』、韓国精神文化研究院、一九九一年に掲載する「金良善」の項、七七五頁)。

金良善氏の証言を信じるならば、彼が『両儀玄覽図』を博物館の庭に埋めたのは、北朝鮮軍によってソウルが奪取された時のことであり(六月末)、その年の秋に、国連軍がソウルを奪回した時に(九月末)、金良善氏は『両儀玄覽図』を庭から掘り起こしたことになる。いずれにしろ、金良善氏が博物館の収蔵品を日本やアメリカなどの海外に移送したのであれば、国連軍がソウルを奪回した一

九五〇年九月以降のことであろう(なお、翌一九五一年一月初旬に、ソウルは再び北朝鮮軍と中華人民共和国軍によって一時占領され、その後はどなく国連軍がソウルを再奪取している)。

ところで、前掲の事典では「博物館の所蔵品を日本の国際基督教大学に一時保管した」と述べているが、国際基督教大学は一九五三年に創立された大学であり、その年の四月に初めての新生を入学させている。博物館の収蔵品を国際基督教大学に移送したのであれば、一九五三年の四月以降ということになるが、現在、国際基督教大学には、韓国から資料を一時保管したという記録は何ら残っていない。博物館の所蔵品を日本に移送したことが間違いないのであれば、国際基督教大学ではなく、当時既に日本で開学していた他のキリスト教系の大学であろう。

なお、筆者が二〇〇四年一二月に崇実大学校韓国基督教博物館を訪問した際にも、同博物館学芸員の方から、『両儀玄覽図』は朝鮮戦争中に日本の国際基督教大学で一時保管してもらっていた、との説明を受けた。『両儀玄覽図』の国際基督教大学一時保管説が、いつ頃、誰によって初めて説かれるようになったのかは不明である。

(14) 前掲の鮎澤信太郎「利瑪竇の両儀玄覽圖に就いて」、四六頁参照。

なお燕行使とは、通常、朝鮮が清朝統治下の北京に派遣した使節を呼称する場合に使っている用語であるが、本稿では明代に朝鮮から派遣された使節についても便宜上燕行使という用語を使用したい。

- (15) 前掲の鮎澤信太郎「マテオ・リッチの両儀玄覽図について」、七〇八頁参照。

- (16) 前掲の金良善『梅山国学散稿』、一八七頁参照。

- (17) 例えば、朝鮮地図学史研究の碩学李燦氏の『韓国の古地図』（汎友社、一九九一年）では、金良善氏の前掲論文を典拠にして、「黄氏の家では、この地図を明廷の下賜品と伝えているが、黄汝一の子東順の『燕行録』にこの地図を一六〇四年到北京で入手したと簡略に記録している」と述べている（同書、三四九頁）。

- (18) 前掲の吳尚学「朝鮮時代の世界地図と世界認識」、一一八頁参照。

- (19) 『国朝文科榜目』、宣祖年間の「乙酉年別試榜」を参照。

- (20) 黄汝一が文科及第後、初めて職位されたのがいつ頃なのか不明である。但し、彼は宣祖二十一年一月二十日に藝文館検閲を罷免されているため、それ以前に同職に任命されていたことは間違いないであろう（『宣祖実録』宣祖二十一年一月甲辰の条参照）。

- (21) 『宣祖実録』宣祖二十七年二月庚寅の条。

- (22) 『宣祖実録』宣祖三十一年九月戊子の条。

- (23) 『宣祖実録』宣祖三十一年十月癸酉の条。

ただし、同書、同条には「陳奏使右議政李恒福副使工曹参判李廷龜書状官司藝黄汝一赴京」とあるのみで、漢城出發の日時は不明である。そのため本論では、漢城出發をとりあえず十月とした。

- (24) 『宣祖実録』宣祖三十四年十月丙戌の条。

同条では、「醴泉郡」を「醴川郡」と表記している。ところで、黄汝一の醴泉郡の郡守がいつまで続いたのかという点については、史料に明記されていないために不明である。但し、『宣祖実録』によれば、宣祖三十七年の二月には李忠可という人物が醴泉郡守として政府に牒呈を提出している記事が見えるため、その時までには醴泉郡守を転任していたことは間違いない。

- (25) 『光海君日記』（鼎足山本）光海君七年四月甲辰の条。

- (26) 『光海君日記』（鼎足山本）光海君七年六月癸未の条。

- (27) 『光海君日記』（鼎足山本）光海君十年十一月甲午の条。

- (28) 『光海君日記』（鼎足山本）光海君十二年四月戊午の条。
なお、同条に「奏聞使黄中允奉表如京師」とあるが、彼が正使として参加していたわけではない。

- (29) 『西征日録』は、黄中允の文集である『東溟先生文集』巻六「雜著」に収録されている。林基中編『燕行録全集』

(全一〇〇巻、東国大学校出版部、二〇〇一年)の第一六巻にも収録されているが、同書は『東溟先生文集』所収の『西征日録』の影印版である。『西征日録』は、光海君十二年三月二十六日から書き始められ、同年八月十七日の北京滞在中で終わっている。なお、彼ら使節が北京滞在中に万暦帝が死去したため、予定以上に北京に滞在しなければならなかった。

(30) 前掲の金良善『梅山国学散稿』、一八七頁参照。

(31) 官撰史料から燕行使に参加した人名は、正使、副使、書状官を別にすれば、その確定は困難に近い。例えば正祖三十六年七月の「冬至使」の場合であっても、『宣祖実録』には、「冬至使礼曹参判宋駿等発行」とあるのみで、正使宋駿の氏名だけが知られ、彼以外の使臣の名前や使行員の総数、或いは使節の帰国した年月日さえも不明である(『宣祖実録』宣祖三十六年七月己卯の条を参照)。

(32) 『東溟先生文集』巻八、「附録」、「家状」を参照。

(33) 黄中允が生前に著述した詩文を収録する『東溟先生文集』には、金良善氏が言う宣祖三十七年に黄中允が著述した『燕行録』は収録されていない。

(34) 『平海郡誌』は、韓国精神文化研究院(現在は韓国国学中央研究院と改称している)などで所蔵している。なお、同書については、『朝鮮時代私撰邑誌』江原道篇(影印版、

一九九〇年、韓國人文科学学院)に収録されているものを利用した。

(35) 黄汝一の使行日記『銀槎録』は、『燕行録全集』巻八に収録されている。ちなみに『燕行録全集』には、明代に派遣された使節の使行日記がおよそ百八点収録しているが、その中で「朝天録」と題するものは、四十二点に達する。「朝天日録」、或いは「朝天日記」と題するものまで含めれば半数に達する。

(36) 『仁祖実録』仁祖元年四月壬申の条、仁祖二年四月癸巳の条。

(37) 『仁祖実録』仁祖七年十二月己未の条。

(38) 『仁祖実録』仁祖十一年五月己亥の条。

(39) 李暉光の官界における略歴や彼の世界地理認識については、拙稿「朝鮮儒学者李暉光の世界地理認識」(『朝鮮学報』一九二輯、二〇〇四年)を参照されたい。

(40) 『宣祖実録』宣祖三十五年四月癸丑の条、宣祖三十六年四月癸丑の条。

(41) 『宣祖実録』宣祖三十六年六月庚寅の条。

(42) 『宣祖実録』宣祖三十六年八月癸卯の条。

(43) 『芝峯類説』の「凡例」には「取引書籍六經以下、至近世小説諸集凡三百四十八家、取録人姓名、自上古迄本朝得二千二百六十五人」とあり、著述にあたって多くの典籍

を参考としていることが知れる。

(44) 李睟光が『芝峯類說』の中で「使臣馮寶實」と誤写した部分は、これに止まらない。同書、卷一、「天文部」の「天」の条においても、「歐羅巴國人馮寶實」と誤記している。この点からも、李睟光が弘文館で『坤輿万国全図』を閲覽した時に、簡単なメモ程度しか書き留めておかなかったことが分かる。

(45) 李睟光の三回にわたる北京使行の中でも、第二回と第三回の使行については、彼の文集である『芝峯集』の卷一〇「朝天録」と卷一六「續朝天録」である程度うかがい知

ることが出来る。それらの中でも第二回目 of 使行の際には、北京の宿泊所で安南の使臣等と文書を交わしており、第三回目には、同じく北京で、琉球や暹羅の使臣と文書を交換しているなど、彼の知的関心の広さが知れる。但し、北京滞在中のことは詩文のみが残されているだけで、彼の詳細な行動については記していない。

(46) 李睟光が『芝峯類說』の中で、『坤輿万国全図』、ないしは『両儀玄覽図』の内容を引用していることについては、前掲の拙論で明らかにしている。

【付記】『両儀玄覽図』の閲覽に際しては、崇実大学校韓国基督教博物館学芸課長최은수氏をはじめとする館員の方々の協力を得ました。お礼申し上げます。

(富山大学教授)

On Matteo Ricci (利瑪竇)'s the Yangwihyeonrando (兩儀玄覽圖) Introduced into Korea

SUZUKI Nobuaki

Matteo Ricci published the Yangwihyeonrando in Beijing in 1603. Today, there are only two existent copies in the world today and one is under the ownership of the Korean Christian Museum at Soongsil University in Korea. This paper aims to trace the course of this world map from its discovery in 1936 in Korea to the present and endeavors to unveil who brought the map into Korea as well as the approximate date of when it was brought in. As a result, the following became clear. The Yangwihyeonrando owned by the Korean Christian Museum at Soongsil University was purchased by Hoagtungyung in Beijing in 1604 or 1612. Furthermore, it is quite possible that Li Su-gwang (李睟光), who wrote the *Jibongryuseol* (芝峯類說), had read through the Yangwihyeonrando as well.

The Legal Position of the Hanggeo-wae (恒居倭) in Joseon (朝鮮) Sampo (三浦)

——The Exercise of “Kendanken” (検断権) or the Jurisdiction of the
Joseon and Tsushima Governments Over the Hanggeo-wae——

LEE Tae-hun

A previous study discussed whether or not “Kendanken,” or jurisdiction, had been exercised so as to obtain clues regarding the legal position of the Hanggeo-wae in Sampo. “Kendan,” a word used in Japanese medieval history, means arresting criminals, examining criminal cases, and handing over a judgment.

In the previous study, it was pointed out that Joseon had abandoned its “Kendanken” over the Hanggeo-wae because the Joseon government in August of 1428 had left a murder case unquestioned with the Hanggeo-wae. Lord So’s ambassador of Tsushima Island said that he went abroad